

# 国富町教育研究センター

I	研究主題と副題	2-1
II	主題設定の理由	2-1
III	研究のねらい	2-2
IV	研究仮説	2-2
V	研究の想	2-2
VI	研究組織	2-2
VII	研究の実際	2-3
1	研究の基本的な考え方	2-3
(1)	「教えて考えさせる授業」が目指すもの	2-3
(2)	「教えて考えさせる授業」の構成	2-3
(3)	家庭での学習と関連を図る「学びの習得サイクル」	2-4
(4)	研究の方向性	2-4
2	授業実践による検証～「教えて考えさせる授業」＝習得型授業の構築	2-4
(1)	「教える」段階での指導の工夫	2-4
(2)	「考えさせる」段階での指導の工夫	2-5
(3)	授業構成や単元構成の在り方	2-7
3	家庭との連携	2-8
(1)	予習（冒頭予習を含む）に対する意識調査（家庭、指導者、子ども）	2-8
(2)	予習ノートを活用した家庭学習	2-9
(3)	「予習ノート」実施後の意識調査（子ども、保護者）	2-9
VIII	成果と課題	2-10
1	「教えて考えさせる授業」について	2-10
2	予習を中心とした家庭との連携について	2-10
○	引用・参考文献	2-10
○	研究同人	2-10

## I 研究主題

「確かな学力」を育てる国富の教育プラン

～学びの習得サイクルを重視した授業の構成と家庭との連携～

## II 主題設定の理由

少子高齢化や経済格差が進む極めて厳しい社会状況の今日、次の時代を背負う子どもたちには、これらを乗り越える健康や体力はもちろん、「知」の側面である主体的に学び考え判断できる能力としての「確かな学力」を育成することが緊要である。

本町の最重要な教育的課題は学力の向上である。本町の子どもにこの確かな学力を身に付けさせるための課題として、次の2つがあげられる。

- 1 各学校において、学習指導要領の趣旨に沿った指導となるよう授業の工夫改善を図ること
- 2 家庭において、望ましい学習の仕方を身に付けさせること

授業の工夫改善については、昨年度までの協調学習の研究から、子どもの学習心理・認知過程を踏まえた学習理論の重要性を確認した。「確かな学力」を身に付けさせるには、思考力・判断力・表現力等の育成が重視される。知識を活用しなければならない説明や話し合い、また表現する等の言語活動はその意味で大切である。しかし、その活動は、基礎的基本的な知識・技能の確実なおさえが前提となる。子どもたちの学力差が少ない本町においては、まず配慮されなければならないことである。このような視点に立った「どの子どもにも理解できる」授業の構築、学習指導過程の見直しが必要である。

家庭学習の面において、十分とは言えない学習習慣の問題とともに考えられなければならないことは、学校の授業と家庭学習との関連の問題である。家庭学習は一部教科を除き、復習を中心とするという指導の実態がある。自ら学ぶという計画的・主体的な学習態度は、学年・学校段階が進むにつれて大きな意味をもってくる重要な学習態度であるが、そのような学習態度を育てるためには学校での指導が欠かせない。しかし、実態として授業と関連を図った家庭学習の指導、特に予習と関連を図った指導はあまり行われていない。学習機会の一つである予習には、あらかじめ学習内容を概観することで、授業を効果的に理解したり授業への構えをつくったりするという大きな意味もあるが、先に述べた主体的な学習態度の形成とも密接につながるものである。学校と家庭学習（予習や復習）との効果的な連携の輪（「学びの習得サイクル」と名付ける）の構築を検討する必要がある。

本研究センターではこれらをふまえ、今年度から東京大学市川教授の提唱する「教えて考えさせる授業」の考え方をもとに、子どもたち一人ひとりが真に分かり、教師の側からみてもこれならできるという授業、基礎的な知識・技能の確実な習得が図られる「習得型スタイルの授業」の確立を目指す研究に取り組む。また、予習を手掛かりとし、家庭学習の指導の在り方についても研究を行い、「学びの習得サイクル」の確立に向けた研究に取り組む。

授業研究に際しては、研究員全員が検証授業を行い、学校と共に課題解決にあたっていきたい。小学校算数と中学校国語を中心に研究を進める。また、授業と家庭学習との連携については、予習を手掛かりとした研究を行うが、次年度は復習をも含めた研究をしていくことになる。

本センターのこのような研究は、今日の教育の期待に応えるものであるとともに、国富町が目指す「心豊かで いきいきと輝く 人づくり」（第5次総合計画）に則った国富のこれからの教育の実現に大きく関わるものである。

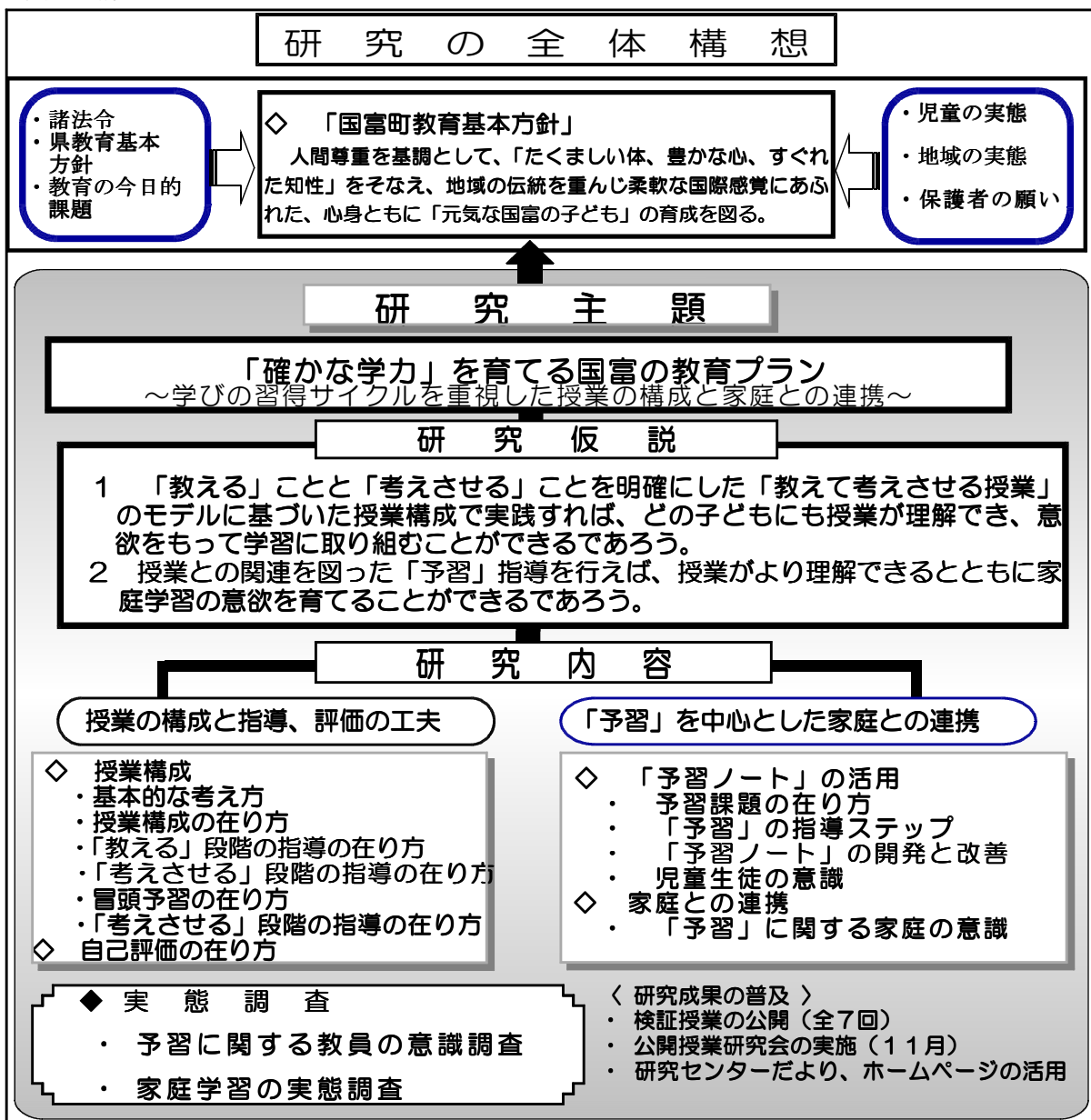
### III 研究のねらい

「教える」と「考えさせる」ことを明確にした習得型授業の構築、授業と家庭学習との関連を図った「学びの習得サイクル」の研究を通して、授業の工夫改善と家庭学習の在り方を追求し、子どもに「確かな学力」を身に付けさせる。

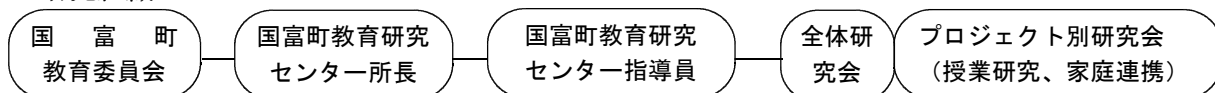
### IV 研究仮説

- 1 「教える」と「考えさせる」ことを明確にした「教えて考えさせる授業」のモデルに基づいた授業構成で実践すれば、どの子どもにも授業が理解でき、意欲をもって学習に取り組むことができるであろう。
- 2 授業との関連を図った「予習」指導を行えば、授業がより理解できるとともに家庭学習の意欲を育てることができるであろう。

### V 研究の構想



### VI 研究組織



## VII 研究の実際

### 1 研究の基本的な考え方

#### (1) 「教えて考えさせる授業」が目指すもの

学習指導要領への対応や学力の向上に向け、授業の工夫がさまざまに行われている。しかし、それらにはまだまだ課題が多い。例えば、「教える」ことを後回しにして自力解決から始める授業の場合、子どもによっては、どんな知識・技能をどう使えばよいか分からず時間が過ぎていく。逆に必要な知識・理解をもった子どもには、簡単に解決できてしまい退屈な授業となったりする。また、学習過程に話し合い活動や問題解決的な活動がしばしば組み込まれるが、必要な知識や技能が子どもに押さえられていない場合はその活動が上手く進まない。

さらに、学習の目的、内容への意識や学習で得られたものに対する自身への問い返しが無い場合は、子ども一人一人の概念の再構成＝確かな知識の獲得に結びつきにくい。

「教えて考えさせる授業」は、東京大学の市川伸一教授が認知心理学の研究成果<sup>\*1</sup>を生かして提唱された知識・技能の確かな定着とそれらを活用する力を育てることもねらった授業、習得を重視した「習得型授業」であり、先に挙げた課題に応えられる可能性をもつ授業である。

※1 「・・・大切にしたいのは、「理解」にはかならない。理解できなければおもしろくない。理解できなければ、すぐ忘れてしまう。理解できなければ、応用的な問題も解けない。」（東京大学市川教授）

これに加え、「他人の考えを聞いたり、他人に説明したりする過程を繰り返すことにより、人が自分の「経験則」をとらえ直し、・・・抽象度の高い説明モデルを獲得し得る。」（東京大学 CoREF 報告書平成 23 年度）は、活用する力を育てる言語活動（説明する、話し合う等の表現活動）の意義を指摘する重要な学習理論である。

#### (2) 「教えて考えさせる授業」の構成

「教えて考えさせる授業」は、習得を重視する授業である。しかし同時に、「教えられた事」を活用する力の育成もねらうものである。（図 1）

下に示したように、授業は教師の説明（「教える」段階）から入り、必ず子どもの理解状況を確認した後、知識を活用する段階を経て、習得を確かなものにする。活用と習得は繰り返され、切り離せない。最後に、自分で学習を評価することで学習後の変容を自ら確かめる。（以上「考えさせる」段階）

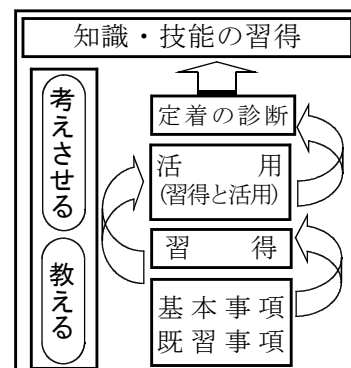


図1 【習得型授業】

#### 【「教えて考えさせる授業」の学習指導過程】

指導過程		各段階の概要	
教える	知る	(冒頭予習) ○教える 【ステップ1】	○ 学習内容の概略と疑問点を明確にする。(実態に合わせて設定) ○ 知識や技能を確実に、わかりやすく教える。 ※ 対話や挙手・発言等を通して理解をチェックする。
	確かめる	○理解確認 【ステップ2】	○ 教師の説明や教科書の内容を確実に理解できているか確認する。 ※ 説明や教え合い活動、確認問題等で確認する。
考えさせる	深める	理解深化 【ステップ3】	○ 理解させたことを活用し、誤解・誤答しそうな問題や発展的な問題に取り組みさせる。 ※ 協同的学習等、学習形態を工夫する。
	振り返る	自己評価 【ステップ4】	○ わかったこと、わからないことを自己評価させる。(メタ認知)

### (3) 家庭での学習と関連を図る「学びの習得サイクル」

小学校学習指導要領解説には、授業の冒頭で学習の見通しをもたせたり、家庭において学習の見通しを立てて予習をしたり学習した内容を振り返って復習したりする習慣の大切さが述べられている。授業が重要なことは言うまでもないが、授業完結型の考え方だけで学習内容を定着させたり、学力を効果的に高めたりするには無理がある。

実際、授業だけより復習をすることが、また、復習だけよりも予習を組み合わせる方が学力向上に有効であることは示されている。<sup>\*2</sup>

本研究では、授業だけではなく、家庭での復習や予習も学習内容の習得機会と考える。そして、これらの予習・復習には学校（授業）の学習内容との関連づけが重要である。本研究では、これを「学びの習得サイクル」と考え、このサイクルの確立を目指すこととする。（図2）

「学びの習得サイクル」のねらいは、下記の通りである。

- 1 学習機会を増やす（予習・復習）
- 2 授業への見通しをもたせ、授業での理解を確かなものにする。（家庭での予習、冒頭予習）
- 3 授業での理解を確かなものにする（予習・復習）

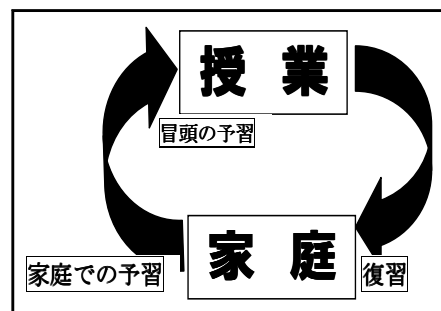


図2 【学びの習得サイクル】

\*2 ベネッセ教育研究開発センター「授業と家庭学習のリンクが子どもの学力を伸ばす」(学力向上のための基本調査 200)

### (4) 研究の方向性

以上のことを踏まえ本研究センターでは、市川教授が提唱する「教えて考えさせる授業」=習得型授業の現場適用の可能性と実践上の課題（下記）を研究する。

また、「学びの習得サイクル」の確立を目指し、家庭学習の指導の在り方について予習を手掛かりとして研究していく。

- 「教えて考えさせる授業」理論に基づく授業実践
- 小学校算数科、中学校国語科で授業スタイルを検証
- 家庭学習の在り方
- 予習の段階的指導の在り方
- 授業冒頭の予習（1分間予習）、「予習ノート」の工夫

## 2 授業実践による検証～「教えて考えさせる授業」=習得型授業の構築

「教えて考えさせる授業」の基本的な理論研究をもとに小中学校で検証授業（7回）を行い、授業構成の在り方や各段階の指導の工夫について検証した。

### (1) 「教える」段階での指導の工夫

#### ア 授業冒頭の予習（1分間予習）

既習内容や本時学習のポイントを確認し問題意識をもって主体的に学習することをねらい、授業のはじめに時間を設定し、教科書を見て内容をつかませたり、予習プリントを確認させたりする等、学習の見通しや疑問点を明確にさせた。予習の様子から疑問点を把握するなど、授業に活かすこともできた。この1分間予習のほかに家庭学習として「予習ノート」を活用する予習についても検証したが、この取組については「3 家庭との連携」で取り上げる。



【1分間予習《中3 国語科》】



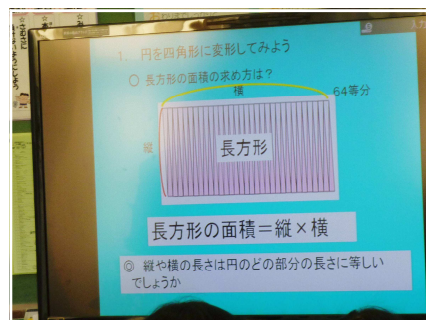
## イ 丁寧でわかりやすく教える指導の工夫

「教える」段階では、子どもにわかりやすく丁寧に教え、後半の「考えさせる」時間を確保する意味からも要点を絞って教えることが大切である。子どもの意欲を高め、効果的に「教える」指導を行うため、パソコン、デジタルテレビ、具体物、掲示資料等を活用した。

### (ア) パソコン、デジタルテレビと具体物の活用

パソコン、デジタルテレビの活用で、子どもの視線はテレビ画面に集中した。円の面積の求積方法をテレビ画面を通して説明し理解が難しい場面は具体物を使って補足説明した。このことで、子どもに効果的に内容を理解させ、関心意欲を高めることができた。

I C T機器の活用は、「理解深化」の段階でも子どもが説明する活動でも効果的であった。



【ICT機器の活用《小6算数》】

### (イ) 掲示資料の工夫

中学校1年「漢字の成り立ち」の学習では、「木」の写真を提示し「象形」の意味と「指事」の意味を説明した。子どもは学習内容を視覚で端的にとらえることができた。

5年生の平行四辺形の面積を求める学習では、「底辺」と「高さ」の意味をしっかりと理解させることが必要である。そこで、資料の向きを変えたり回転させたりして提示することで、子どもが誤解しやすい底辺や高さの定義がしっかりとできた。

## ウ 対話を通した指導

指導者は、一方的に学習内容を教えるのではなく、挙手や発言など子どもとの対話を通して、理解状況を把握しながら教えることが大切である。

4年生の「小数÷整数」、 $4.92 \div 6$ の筆算の仕方を教える学習では、指導者がどこに商を立てるかを子どもに発問したり子どもの声を聞き入れたりしながら教えることで、子どもは納得しながら基本事項を理解することができた。

## (2) 「考えさせる」段階での指導の工夫

### ア 「理解確認」段階

この段階では、問題を解いたり第三者に説明したりすることで理解の定着を図ったり、理解状況を確認したりする。そのためには、問題や学習形態が大切となる。

#### (ア) 「理解確認」問題

検証授業では、教科書の基本問題や練習問題を学習プリントやワークシートなどの方法で示して取り組ませた。このことで、指導者はねらいとする学習内容を確実に押さえ、また、子どもの理解状況を机間指導しながら確認することができた。

#### (イ) ペア・小グループでの学習

認知心理学の研究成果から、理解したことは表現（話し合い、説明）する活動を通して深められる。そこで、表現活動を子どもの実態に応じて工夫することが必要となる。

##### ・ 「なぞり説明」

指導者は、説明の仕方のお手本を全体の場で示してから、子どもに説明させた。他にも、板書の「キーワード」を使った説明、指導者の説明をまねさせる「なぞり説明」などの工夫を行った。これによって、子どもたちは理解したことを自分の言葉で説明することに進んで取り組むことができた。

・ 具体物の活用

算数科「図形」の学習では、口頭説明だけでは説明やその理解が難しい。

小学校算数「円の面積」の検証授業では、円の面積を求積する方法を説明する活動で具体物の活用を行った。このことで、子どもの説明や理解を助けるだけでなく、指導者が理解状況を確認することにも役立った。

理解確認はペアや小グループに限定されるのではなく、子どもの実態に応じて、全体の場で確認することもある。



【具体物での説明《小6 算数科》】

イ 「理解深化」段階

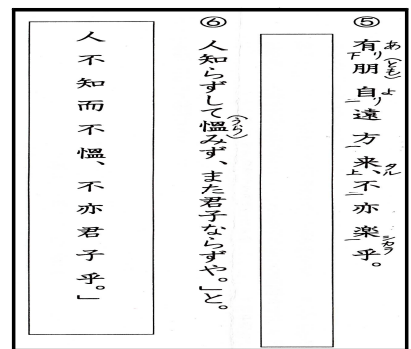
この段階では、子どもたちの思考力・判断力・表現力を育て問題解決する力を高めるために、応用・発展的問題に取り組みせたり、協同学習による問題解決に取り組みせたりした。

(ア) 応用・発展的問題

・ 逆方向の思考を促す問題

中学校3年の国語科の検証授業では、学習してきた訓読文を書き下し文に直すことから、逆に、書き下し文を訓読文に直す問題に取り組みさせた。子どもたちは、今までに理解した「レ点」、「置き字」、「一とレ点の組み合わせ」を意識しながら問題解決する姿が見られた。

学習のポイントが明確になり習熟を図ることができた。

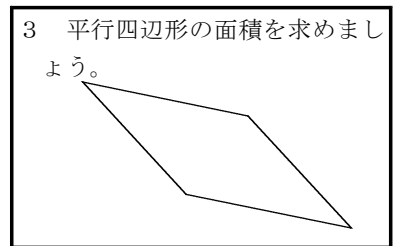


【問題例 中3 国語科】

・ 発見型の問題

図形の面積を求める問題では、公式を使うために必要な条件を見つける力が必要である。そのためには、基本事項の理解と隠された条件への気づきが必要である。

小学校算数科の検証授業（6年「円の面積」、5年「面積」）では、求積するための必要条件となる長さ（半径、底辺、高さ）を実測させたり、問題に隠されている条件を発見させたりする問題に取り組みさせた。子どもは、プリントを回して眺めてみたりじっと凝視したりしながら問題解決に取り組んでいた。



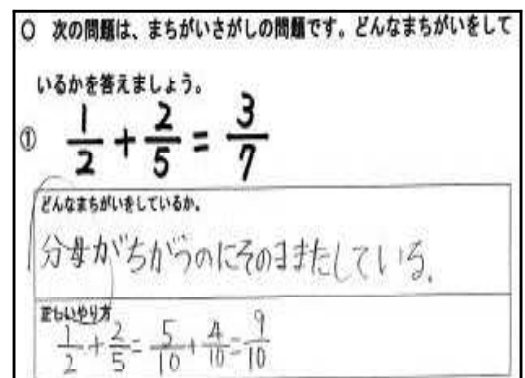
【問題例 《小5 算数科》】

求積問題では、このような発見型の問題が意欲を高め思考力を育てるのに有効であった。

・ 間違い探し問題

学習内容の理解を定着させるために、子どもが誤解・誤答しそうな問題を「間違い探し問題」として取り組みさせた。子どもは理解した学習事項を活用し問題解決に意欲的に取り組んだ。また、なぜ間違っているかを説明させることによって、本時の基礎的な知識・技能の確認と振り返りを行うこともできた。

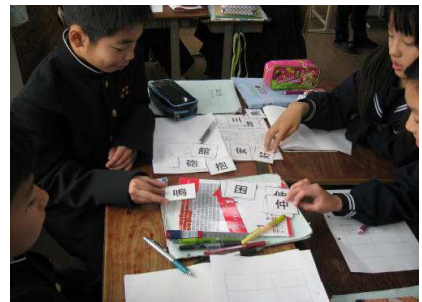
このような学習問題を取り入れることで、子どもの思考力、学習意欲を高めるのに効果的であった。



【問題例 《小学5年 算数科》】

(イ) 協同的問題解決の活動

右は、カードに書かれた漢字を会意と形声に類別する学習の様子である。子どもはそれぞれが理解したことを出し合い、試行錯誤しながら問題解決に取り組んだ。このような問題解決の活動を学習指導過程に取り込むことによって活用する力の育成や理解の定着が図られるだけでなく、思考力・判断力・表現力を高めることができる。



【語群の類別 《中1 国語科》】

ウ 「自己評価」段階

学習を子ども自身のもとするために、「わかったこと」を振り返り自分の言葉で表現させる「自己評価」の場を設定する。

(ア) 学習内容と対応させた自己評価の書かせ方

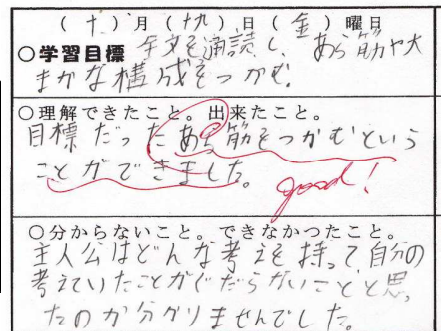
自己評価は、「楽しかった」、「◎」等を書かせるだけでなく、授業で「わかったこと」「わからなかったこと」、疑問等について自分の言葉で記述させることが大切である。

このことによって、子どもの「メタ認知」能力の育成につながり、指導者にも子どもの理解の定着度を診断したり授業改善の手掛かりにしたりできるのである。

(イ) 自己評価カードの工夫

下に示す内容に留意し、自己評価カードを作成した。

- ◇ 子どもの学習への満足度や充実度を◎○△で表記させ、授業でわかったことやわからなかったことを記述する欄を作る。
- ◇ 毎時間の活動が振り返られるよう
  - ア 一枚の用紙にまとめる。
  - イ 学習目標に対して、わかったことやわからなかったことを書く



【自己評価カード 中学校】

(ウ) 子どもの変容

個人差はあるが、「勉強がわかった」という表記から右のような具体的例を挙げて学習内容の何がわかったのか、何がわからなかったのかを明確にするようになった。また、これらのことを家庭での予習や復習に生かす姿も見られるようになった。

計算の幅が広がらないよう切り捨てと切り上げを工夫することが分かった。

※ わかったことが具体的に表記されるようになった。

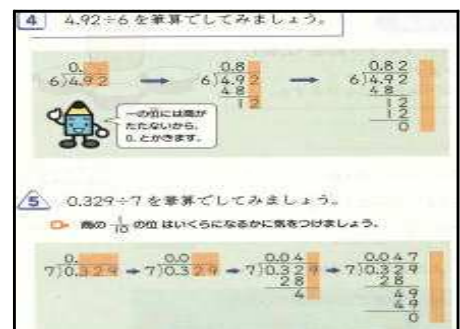
【自己評価カード（12月） 小学校】

(3) 授業構成や単元構成の在り方

応用問題や適用問題など問題解決に取り組む時間を確保するために、「教える」段階の工夫と単元構成の工夫を行い、指導の効率化を図った。

ア 学習の集約

4年生の「少数÷整数」の筆算の仕方を教える学習問題は、一の位に0を立てることを説明する問題と十分の一の位以下でも商に0が立つことを説明する問題に分かれている。そこで、この二通りの考え方を子どもとの対話を通して一度に集約して「教える」ことで、より多くの問題解決に取り組ませる時間を確保することができた。



【問題例 《4年算数科》】



### イ 単元構成の工夫

単元構成を考えると、指導者が授業（単元）のねらいを明確にもち、子どもに「教える」「考えさせる」内容を明確にすることが大切である。

6年生「円の面積」の単元では、円の面積の求め方の理解と公式を活用した円の面積の求積をねらいとして、指導計画（全4時間）を考えた。（表3）

	第1時	第2時	第3時	第4時
主な学習内容	円の面積の見積もり	円の面積の公式の理解	適用問題 発展問題	発展問題 Web学習 単元評価問題

表3 【単元構成 《6年算数科》】

本単元では、「予習」を取り入れた指導により、「円の見積もり」を1単位時間に集約して適用問題や発展的な問題、Web学習単元評価問題等に多く取り組む時間を確保することができた。

### 3 家庭との連携

本町の教育的課題の一つに、望ましい学習の仕方を身に付けさせることが挙げられる。学校と家庭との連携により、家庭学習の機会として主体的に予習に取り組ませることは確かな学力を身に付けさせる上で極めて大切である。

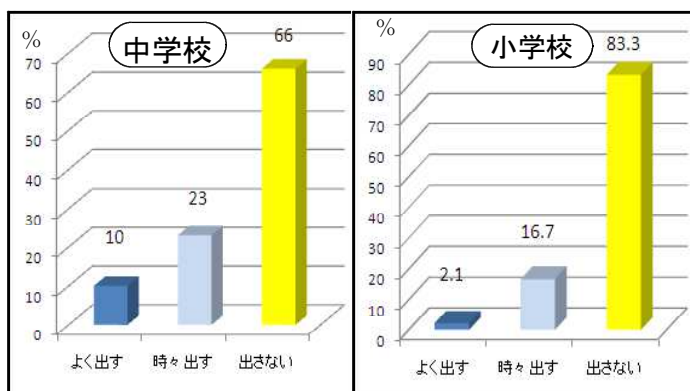
そこで、本研究センターでは、予習の意義を次の二点でとらえ、「学びの習得サイクル」確立の手掛かりとなる家庭学習（予習）の在り方について研究を進めた。

- 1 「授業に向けた先行学習とし、授業の成果を上げる」
- 2 「子ども自身が予習の意味や必要性を感じ、自ら取り組もうとする等、家庭における学習を主体的なものとする」

#### (1) 予習（冒頭予習を含む）に対する意識調査（家庭、指導者、子ども）

予習（冒頭予習を含む）に対する指導者、子どもの意識調査を実施し家庭学習の取組方を考えた。

ア 予習に対する指導者の意識調査  
町内の小中学校の教員に予習に対する意識調査を実施したところ、右のような結果となった。



小・中学校ともに予習はあまり出さないといえる。その要因とし

て「予習より復習が大事」「学習の新鮮さが大事」とする意見が多く出された。

このことから、予習の意義や成果を明確にし指導者が予習の必要性を感じるようにすることが、子どもの学習機会を増やすために必要であるといえる。

#### イ 予習（冒頭予習）に対する子どもの意識 (H24.12 調査)

冒頭予習について、町内三校の小学校で意識調査を行ったところ、多くの子どもが予習が授業の役に立ったと答えている。（表4）その理由としては次のような意見が見られた。

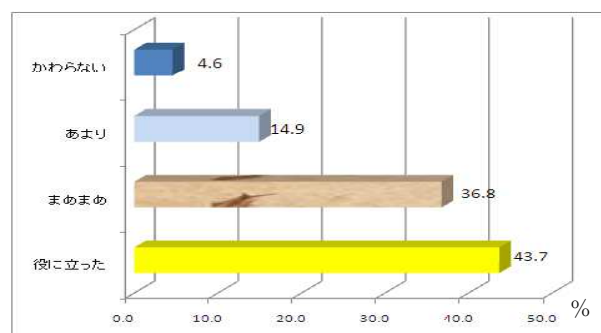


表4 【「予習」に対する意識 小学校】

- ・ 今日どんな勉強をするのかがわかる。
- ・ 問題が解けた。(勉強がわかりやすい)
- ・ 考え方が説明できた。

(2) 「予習ノート」を活用した家庭学習《平成24年12月～平成25年1月実施》

授業との関連を図り、子どもが予習の必要性を感じ取り、主体的な家庭学習を行うための手立てとして「予習ノート」を作成、実践しその活用の在り方について検証した。(図5)

ア 「予習ノート」に至るまでの経過

本研究センターの「予習ノート」は、次のような段階を経て活用に至った。

まず、冒頭予習を実施することで、子どもに予習の意義を知らせやり方に慣れさせる。次に、冒頭予習で行っていたことを中心に家庭で取り組ませ、家庭学習で取り組めるようにした。

イ 予習ノートの形式と内容

「予習ノート」には、予習の意義を考え、次のような内容と形式を取り入れた。

- ◇予習ノートの内容（基本形）
- 1 学習するページを音読する
  - 2 わからない所に印や付箋をつける
  - 3 学習するページの問題を解く

- ◇予習ノートの形式（基本形）
- 1 明日の学習について（教師が示す）
  - 2 予習メモ（予習をした感想、予習した問題）
  - 3 授業を終えて（学習目標に対する自身

ウ 予習ノートの活用

実践では、子どもに三つの予習内容について説明し、自分がやろうと思う内容に10分程度で取り組むように指示をした。

はじめは、やや戸惑いがちであった子どもも見られたが、慣れるとともに取組や内容の充実が見られるようになってきた。また、三つの内容すべてに取り組む子どもも見られるようになった。そして、予習の仕方がわかるだけでなく、授業を通して、予習の必要性やよさを実感する子どもが見られるようになった。

なお、家庭学習に取り組むには、通信等で予習の取組について家庭の理解と協力を得ることも必要である。

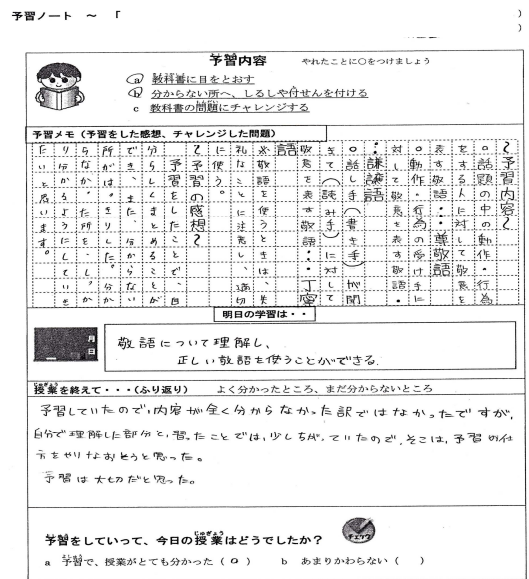


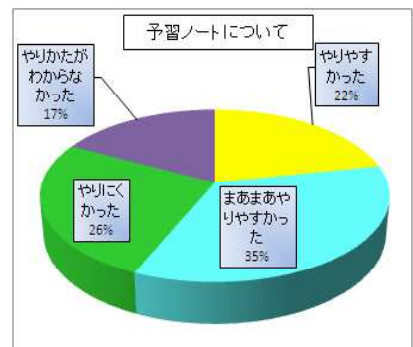
図5 【「予習ノートの例 中学校】

(3) 「予習ノート」実施後の意識調査（子ども、保護者）

ア 子どもの意識

「予習ノート」の使い易さについては、右のグラフのように57%の子どもが使いやすいと答えている。しかし、「やりにくかった」「やり方がわからなかった」と答えている子どももおり、使い方の指導や慣れが必要であるといえる。

また、家庭での予習についても57%の子どもは今後も続けたいと前向きな考えである。その反面やりたくないとする子どももおり、宿題が増えるなど子どもの負担増にならないよう配慮する必要がある。



【「予習ノート」について】

## イ 保護者の意見

予習ノートの活用について、授業実践後に保護者の意識調査を行ったところ次のような意見が多く見られた。

- ・子どもが進んで勉強している。
- ・勉強がわかったと喜んでいる。
- ・机に向かう姿が多く見られるようになった。

「予習」は、将来に役立つ主体的な学習態度の育成という点で非常に大切なことである。指導においては、ねらいを明確にするとともに、地道かつ段階的な配慮が必要である。

「初めは5分でも10分でもよいからざっと教科書に目を通す。次に、わからない所に付箋をつけさせるなど・・・」<sup>※3</sup>とあるよう、継続でできる方法と子ども自身がその効果を実感できることが重要である。家庭との連携を考える場合、この点の共通理解を図っておくことが大切である。

※3 市川伸一 <http://www.889100.com/midori/category/advice/000021.php>

## VIII 成果と課題 〈○成果 ●課題〉

### 1 「教えて考えさせる授業」について

- 「教えて考えさせる授業」の「教える」段階と「考えさせる段階」の授業構成の在り方がわかった。
- 「教える」段階で「教える」ことの集約により、「考えさせる」段階における時間的余裕が生じ協同的学習活動を含めた多様な「理解深化」活動を組み込むことができた。
- 授業冒頭の予習は手軽にでき、授業への構えをもたせるのに有効であった。
- 「ねらい」に対応した「自己評価」の工夫により子ども自身が自分の学習を振り返る姿勢が徐々に育ってきた。
- 「教えること」段階における指導方法を工夫し、実感を伴った丁寧な教えとなるようにすることが必要である。
- 「理解確認」と「理解深化」の課題と活動内容については、内容と指導のねらいに応じてバリエーションを考えていく必要がある。
- 習熟度別指導（少人数指導）に分かれる場合、児童の実態や指導内容について教師間の連携を密にする必要がある。

### 2 予習を中心とした家庭との連携について

- ねらいを焦点化し、取り組みやすい「予習」指導によって、授業理解度が高まるとともに、子ども自身が予習の効果を実感できた。
- 家庭と連携を図ることで、予習への取組意欲を高めることができた。
- 「予習」の継続には、そのねらいと方法について家庭と十分共通理解しておく必要がある。
- 「予習」の継続とその効果について、確かなデータを収集することが必要である。

## 《参考文献》

- ・文部科学省 小学校学習指導要領解説 算数編、中学校学習指導要領 国語編 平成20年
- ・ベネッセ教育研究開発センター「授業と家庭学習のリンクが子どもの学力を伸ばす」（学力向上のための基本調査2008）
- ・長崎県教育委員会『「教えて考えさせる授業」公開授業研修会報告』 平成21年
- ・市川伸一『「教えて考えさせる授業」を創る』図書文化 2008 「教えて考えさせる授業 中学校」図書文化 2012  
「教えて考えさせる授業 小学校」図書文化 2009

## ～研究同人～

所長	豊田暎光（国富町教育長）		
研究指導員	柘植幹雄（スクールサポーター）		
研究員	福山憲昭（本庄小）	岩切靖代（森永小）	今村美雪（八代小）
	堀内順一（木脇小）	櫻木愛花（本庄中）	月野龍子（八代中）
	佐藤邦浩（木脇中）		